

[朝鮮の美術展によせて]

李朝前期の花鳥動物画家、李巖^{りがん}について

このたびの展覧には李巖筆「双狗子図」(カット1)が初公開されます。この絵は絹に水墨と彩色で描かれており、図はカットでお判かりのように二尾の小犬と背景に岩、梅、笹竹などが表されたものです。画面の中央部に重なるように前後して置かれた小犬は暖かな日差の中で、一尾はさも気持ち良さそうにまどろみ、もう一尾はそれとは対照的にやや緊張した面持で背後を振り返っています。傍らの笹竹が風に揺らいで、さわさわと音をたてたからでしょうか。後方の梅樹は幹を大きく湾曲させて岩陰から立っていますが、花は満開です。没骨法やたらし込み風な用墨による小犬の柔かそうな毛、そして僅かに黄味を帯びた呉粉地の梅花にはおだやかな陽光が感じられ、地面から斜めに伸びた動きのある笹竹には時折り吹く風が暗示されているようで、早春の静かな情景がよく表現されています。

李巖はこのような親しみもてる童心的な花鳥動物画を描いて名を成した16世紀前半の士人画家ですが、その作品の幾点かを今日に遺しています。筆者の知る限り現存作品は六件、ただしその内二件が双幅仕立のため点数では八幅になります。その他には作風から李巖の作とされている無印の絵が五

幅あります。それらを列記すると以下の通りです。

- 日本にある作品
- ①双狗子図 一幅 個人蔵
- ②狗子図 双幅 個人蔵
- 韓国にある作品
- ③母犬図 一幅 国立博物館蔵
- ④花鳥狗子図 一幅 湖巖美術館蔵
- 朝鮮にある作品
- ⑤花鳥猫狗図 双幅 平壤美術館蔵
- ⑥花鳥双雁図 一幅 同上
- 李巖筆と見做されている作品
- ⑦翎毛図 一幅 韓国国立博物館蔵
- ⑧花鳥図 一幅 湖巖美術館蔵
- ⑨狗子図 二幅 日本・個人蔵
- ⑩狗子図 一幅 米国・フィラデルフィア美術館蔵

これらの作品には意外なことが二つあるようです。一つは③の「母犬図」と⑦の「翎毛図」の二幅を除けば他は全て我国に伝世したものであること、そしてもう一つは真筆とされる絵の落款はすべて二つの印章があるだけで、署名や題賛などは一切ないことです。

李巖は日本でも古くから「完山静仲」の名で知られていたようで、例えば狩野永納は彼を日本の室町時代の画僧と考え、著書の『本朝画史』(巻第三・中世名品の章)に載せ、「完山、彩色狗子を善画す、宋の毛益に学ぶ、而して最も佳なり」と記しています。完山静仲と



4 花鳥猫狗図 双幅 紙本着色⑤

は李巖が用いた呼称で、完山は彼の本貫である全羅北道全州にある地名、静仲は字(あごな)です。なお、号は文献には出てきませんが、彼の印章に「琴軒」の文字があるため琴軒と号していたと考えられます。生年は燕山君(李朝第十代王)5年(1499)です。第四代王・世宗の第四子臨瀛大君李璆の曾孫に当たる、いわば李朝宗室の出身で、杜城令の位を授かっています。彼の伝記は16世紀の文人魚叔権の著した『裨官雜記』に比較的詳しく書かれています。没年は未詳です。ただ、『朝鮮王朝實録』に仁宗元年(1545)1月の記事として李巖が官命により図画署の画員で、当代随一の名手李上佐と共に中宗の御容(肖像画)の追画に参画したことが載っていますので、1545年には健在であったことが分かります。

我国の文献では更に『古画備考』収録の「高麗朝鮮書画伝」があり、そこでは『本朝画史』の誤りを正して、朝鮮画人としています。同書には(礼之部)に令巖、(久之部)の完山後人の項に画史完山静仲、(勢之部)に静仲と、三箇所にその名が見られ、作品は「雁、草花、虫」「花鳥猫狗児、絹彩双幅」「架鷹図、絹本着色」の三点が記載されています。これらの内「花鳥猫狗児」は作品⑤に該当し、その所在が確認出来ませんが、他の二点は目下所在が不明です。

次に李巖の印章についてふれま

5 猫狗子図

尾形宗謙筆
寛文元年作
(1661)
河野元昭著
講談社刊/1973
『日本の名画5
尾形光琳』より
転載



すと、遺品には次のA、B、C、Dの4箇が使用されています。Aは「静仲」白文方印、Bは「琴軒」白文鼎形印、Cは印文未詳の鼎形印、『古画備考』記載の「巖」か、Dは「完山静仲」白文方印で、使用例の一番多いのはAとBの組合わせです。作品リストの①はA+B、②はC+D、③はB+A、④はB+A、⑤はB+A、⑥は筆者所持の写真は上端部が切れているのか、Aは確認出来ませんが、その上に別印があるのかどうか判かりません。

李巖は南宋画院の待詔で花卉翎毛をよくし、猫の名手として世に知られる毛益に学んだとされていますが、その作風には独特なものがあります。岩や樹には古風な皴法を用いる一方、画の空間には蜂、蝶、小鳥などを飛遊させて、明かるく近代的な、どこか李朝民画の世界を彷彿させるような画趣を漂わせています。我国に伝わる李巖の画のあるものは伝徽宗、又は宋末元初の花鳥図の名手、銭舜舉の極(きわめ)が付けられて、大事にされてきました。従って日本の近世絵画に与えた影響も大いに考えられます。事実、伝小栗宗湛筆や狩野玉榮筆、あるいは宗達筆の花鳥猫狗図には無視しえないほど李巖の作風とよく似たものもあります。その一例ですが、カット5は光琳・乾山兄弟の父親、尾形宗謙が寛文元年(1661)に描いたものです。カット4の右と比較してみてください。(吉田宏志)

1 双狗子図 絹本着色①



2 母犬図 紙本淡彩③



3 花鳥狗子図 紙本着色④

